



住居を探る

住居の起源と変化を追う

炊飯

弥生時代

炉で土器を直接火に掛け、煮炊きをする。カマドが用いられるのは、古墳時代になってからである。

モミ痕のある土器片（西川津遺跡出土）

精米・選別

箕（み）を用い風選をし、米と籾殻を分ける。写真の箕は最近のものであるが、弥生時代もこれと同じものを使用していたと思われる。

箕 10

ひと昔前

カマドで炊飯する。

写真協力：岩崎直樹氏

釜 14

箕や唐箕（とうみ）を用い選別し、唐臼（からうす）でついて精米する。左の写真は、時代はうんと下がり、最近まで一般農家で使われていた動力精米機。

唐臼 11

唐箕 12

千石どおし 13

現在

電気炊飯器。誰でもおいしく炊ける。

夕食時の一家団らんは、いつの時代も変わらなかったに違いない。では、いただきマース！

だれでも気軽に精米できるコイン精米機が町のあちこちに見られる。



人類が誕生してから現代にいたるまで、その生活の拠点となったのは住居でした。

狩猟・漁労・採集による暮らしをしていた人々も、稲作が伝わったころの人々も、さまざま暮らしの中で、人びとはどのような所で、どのような住居で暮らしていたのでしょうか。

この章では、発掘調査の結果にもとづきながら、古代の住居を探っていきます。また最後のページでは、近代建築の中で姿を消しつつある江戸時代以降の伝統的な住居である民家を訪ねてみました。



具をすべて過去のものにしてしまった。今じゃ千歯（せんは）きも唐箕（とうみ）も博物館に置いてあるんだから、びびりしちゃうよ。

そりゃあ、楽にはなった。「米」という字は「八十八」の組み合わせでなってるけど、それは米作りには八八回もの手数をかけるという意味もあったんだ。でも逆に、米作りをする人の数は減ってきた。弥生時代は弥生人のほとんどが農民だったのに……。

わずか数一〇年の間に、二〇〇〇年以上かけてやってきたことが大きく変わってきている。これが時代の流れというやつなんだらうな。これからの米作りはどうなっていくのか予測もつかない。古代から脈々と受け継がれている田んぼも、現代人は手放しつつある。なにを隠そう、ぼくら鞍山（あざな）子（こ）も絶滅の危機にあるんだから……。

1の写真提供：佐藤重利氏
2、4の写真提供：安来市荒島地区活性化推進協議会
3の写真提供：長崎義人氏
5、14の写真提供：安来市立民俗資料館蔵